

2013 · 第3辑

日语教育与 日本学

■ 日语教育研究 ■ 日本语学研究 ■ 日本文学与比较文学研究
■ 翻译与中日语言对比研究

执行主编◎徐 曙



华东理工大学出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

2013 · 第3辑

日语教育与 日本学



华东理工大学出版社
EAST CHINA UNIVERSITY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY PRESS

· 上海 ·

图书在版编目(CIP)数据

日语教育与日本学(第3辑)/徐曙主编. —上海:华东理工大学出版社,2013.5

ISBN 978-7-5628-3551-6

I.日... II.徐... III.①日语-语言教学-文集②日本-研究-文集

IV.①H369-53②K313.07-53

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第095998号

日语教育与日本学(第3辑)

执行主编 / 徐 曙

责任编辑 / 车银儿

责任校对 / 金慧娟

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社有限公司

地 址: 上海市梅陇路130号, 200237

电 话: (021)64250306(营销部)

(021)64252875(编辑室)

传 真: (021)64252707

网 址: press.ecust.edu.cn

印 刷 / 常熟华顺印刷有限公司

开 本 / 787mm×1092mm 1/16

印 张 / 8.5

字 数 / 207千字

版 次 / 2013年5月第1版

印 次 / 2013年5月第1次

书 号 / ISBN 978-7-5628-3551-6

定 价 / 38.00元

联系我们: 电子邮箱 press@ecust.edu.cn

官方微博 e.weibo.com/ecustpress

淘宝网 <http://shop61951206.taobao.com>



日语教育与日本学

2013·第3辑

日语教学研究会上海分会 主办

编委会主任:徐一平

编委会副主任:刘晓芳 张 辉

执行主编:徐 曙

编委会顾问

(按姓氏汉语拼音为序)

陈俊森 高 宁 侯仁锋 揭 侠 刘金才

陆留弟 皮细庚 宿久高 谭晶华 王铁桥

王 勇 徐一平 于荣胜 赵 刚 赵华敏

编委会成员

(按姓氏汉语拼音为序)

陈多友 冷丽敏 李 强 刘晓芳 刘雨珍

毛文伟 潘 钧 庞志春 钱晓波 宋协毅

孙成岗 吴 川 徐 冰 许慈惠 徐 曙

目 录

• 日语教育研究 •

教養教育に資する日本語教材作成に向けて

——『基礎日語総合教程』第4冊を例に 赵华敏 大野纯子(1)

关于日语会话课的调查报告 劳轶琛(12)

日语专业学生的课外学习策略研究 周新平(22)

• 日本语学研究 •

训读的起源与汉文文化圈的形成

——评金文京著《汉文与东亚——训读文化圈》 潘钧(31)

汉日语邀请信的语用特征分析 王晓(39)

社会语言学视野中的近代日语省略型祈使表达研究 陈慧玲(51)

自动词使役句和使役性他动词句的对比研究 马佳瑶 皮细庚(60)

从日语的语音特点看日本的国民性格 何冬梅(73)

结果副词与动态静态句

——从汉日比较的角度 黄春玉(80)

日语拟态副词的表词特色

——以四音节词为中心 邱根成(89)

• 日本文学与比较文学研究 •

土岐善麿の初回の中国訪問をめぐる 小田切文洋(98)

唐代科举诗与平安朝文学 李宇玲(108)

日本中世文艺作品中的“树上法师”

——浅析《景德传灯录》及禅宗的影响 陆晚霞(116)

• 翻译与中日语言对比研究 •

日本现代短歌翻译的文体与形式

——结合与古典和歌之对比 金 中(126)

教養教育に資する日本語教材作成に向けて ——『基礎日語総合教程』第4冊を例に

北京大学 赵华敏 大正大学 大野纯子

〔摘要〕 近年来,大学教育的模式问题已经成为世界各国有识之士关注的话题。在中国,随着升学率的不断提高、教学环境和培养目标的变化,培养什么样的人才也成了热点问题。本论文以大学教育中的日语专业的教育为例,考察了其基本的教育方针。同时,作为探讨未来培养目标的参考材料之一,介绍了日本大学教育中有关“学士力^①”的新思维,并且针对赵、大野等参照这一新思维编写的教材对学生素质的形成、思考和行为能力的培养所带来的影响进行了探讨。

〔关键词〕 日语专业 人才培养 综合日语 “学士力” 素质教育

1. はじめに

日本語学科を卒業した学生が「私は何も専門がない」と発言することがある。どのような時にこう言うかということ、国内外を問わず進学する大学院を選ぶ時、「私は専門がないので、どういう研究科に行けばいいかわからない」「私は今まで専門がなかったので大学院で一つの専門を身につけたい」と言うのだ。これは日本語学科のみならず、外国語学科全体の問題である。

日本語学科の教育を例にとれば、入学後の2年間は日本語の技能向上を目指し、試験の高得点と資格試験合格を究極の目標に設定している。多くの学生はこれをこなしているわけだが、学生の立場ではうまく言葉に表現して言えないものの、4年間受けてきた大学教育は高校時代の延長のようなカリキュラムであり、それゆえに自分の専攻に自信が持てないのではないかと。学生だけでなく、私たち教員もプライドを持って、卒業生を送り出すにはどうしたらよいだろうか。学生個人の問題のみならず、同時に日本語学科での教育全体を考えるなら、教学大綱のような縛りの必要性はあるが、欧米の大学に見られるように、学生の個性、または個々人の目的を尊重することも考えなくてはならない。また、大学教育全体の成熟により、大学の個性をより考慮すべき時期が来ていると

① 学士の備えるべき知識、教養、能力の総称

考える。

教学大綱にそって綿密に組まれたカリキュラムで注意深く養成された中国の学生は、漢字圏の出身者であるということをしひいても、世界各国の日本語学習者の中で群を抜いたレベルを誇っている。しかし、その学生が、冒頭で紹介した自嘲のつぶやきをするのなら、従来の教育方針に、何らかの是正がされなくてはならない。

陳俊森(2012)は教学大綱について、“这一实用主义倾向很强的教学大纲,工具性指导思想占据了主导地位,其直接的后果就是导致了人文教育的缺失(この実用主義傾向の強い教育大綱は、日本語をほとんど道具としてのみ位置づけているので、これが人文教養教育の喪失をもたらすことになる)”と述べている。陳はさらにこの状況を次のように細かく記述している。“日语教育不等同于日语专业,它只是日语专业人才培养中的一个组成部分。以往的研究或讨论中,常常把二者混为一谈,这样容易导致一种倾向,似乎日语专业只培养懂日语、会日语的人才,而忽略了它隶属人文学科,它的人文性、教养性应占据更重要的位置。(日本語教育イコール日本語専攻ではない。日本語教育は日本語専攻人材養成の一部にすぎない。従来の議論では、二者の相違を明確に区別してこなかった。これは次のような結果をもたらしかねない。その結果とは、「日本語専攻の人間は日本語さえわかれば、それで立派な人材だ」と解することだ。そうすると「日本語専攻は人文学部の一部であり、人文学部では学問としての人文、教養が重要な位置を占める」ということを忘れがちになる。)”陳の主張を言葉を変えて述べるなら、日本語専攻では「日本語を学ぶ」こともさることながら、大学生としてふさわしい教養、知識を「日本語で学ぶこと」も、前者に劣らず重要だということだ。

そこで、本稿は、まず中国の大学教育方針の方向の変化と、日本の大学教育方針の新動向を概観し、次に最近、筆者らが執筆した総合日本語の教科書本文が、学生に何を日本語「で」学ばせることができるのかを紹介する。

2. 中国の大学における教養教育、特に外国語教育に関する意識の変化

“general education”(日本語では「教養教育」、中国語では「通識教育」という概念を初めて大学教育に導入したのは19世紀初め、アメリカのBowdoin College(“博徳学院”)のA. S. parkard(“帕卡德”)であると言われている^①。それ以来、「教養教育」の目指すものは多くの関係者に議論されるところとなった。

2.1 中国の大学における教養教育

王前(2005)によると、中国における教養教育は次の段階を踏んでいる。まず、1940—1952年までは教養教育と専門教育が強く意識され、1952—1978年は専門教育に重心が移った。1978—1995年は専門教育一辺倒の傾向を正し、教養教育を重視し始める。1995—現在に至るまでは人文教育を重視し始め、具体的には、文学、歴史、哲学、芸術などの人文科学方面の教育に力を入れ、なおかつ自然科学方面の教育も重視するという、教

① baike.baidu.com/view/628666.htm 2012年9月13日

養教育と専門教育をミックスさせた教育が理想的だという傾向を見せている。

“国家中长期教育改革和发展规划纲要(2010—2020年)(国家中长期教育改革とその発展計画概要)”^①では“信念执着、品德优良、知识丰富、本领过硬的高素质专门人才和拔尖创新人才(強い信念、高い道德観、豊富な知識、秀でた能力を持つ、専門知識の高い教養がある人材で、なおかつ抜きん出た創造力のある人材)”を大学の人材養成の目標としている。

この中で特に“知识丰富”は教養教育に任される分野にあたるだろう。しかし、具体的にどのような教育をするべきか、筆者の調べた限りでは、教育部から案が出されていないようである。

2.2 外国語教育に関する意識の変化

次に教養教育の一部としての外国語教育に絞って述べる。どのような外国語の人材を養成するかという課題をめぐって、外国語教育関係者も探求を続けてきた。日本語教育を例にあげて言うと、20世紀80年代の専門的人材の養成から、意識が変わりつつある。その軌跡は年代別の『教学大綱』の「到達目標」から一部覗けるだろう。

『教学大綱』に出ている教育理念に関するキーワードをまとめたのが以下の表である。

教育理念に関するキーワード(年代別)

年代	教育理念に関するキーワード
20世紀80年代	①文法知識 ②読解訓練 ③一定の訳と聴解の能力 ④初歩的な書く能力・話す能力 ⑤専攻と関係のある情報獲得の能力
20世紀90年代	①基礎知識 ②「聞く、話す、読む、書く」の基本技能 ③実際の運用能力
21世紀以降	①基礎知識 ②「聞く、話す、読む、書く」の基本技能 ③実際の運用能力 ④社会文化知識 ⑤文化理解力 ⑥日本語学習ストラテジー ⑦総合運用能力 ⑧異文化間コミュニケーション ⑨日本語でことをなす ⑩総合文化教養

(趙・林 2011による)

21世紀以降の③実際の運用能力、④社会文化知識、⑤文化理解力、⑦総合運用能力 ⑧異文化間コミュニケーション ⑨日本語でことをなす ⑩総合文化教養は語学的訓練を超えて、まさに教養教育の一部であり、「日本語で学ぶ」内容になるだろう。

3. 日本の大学の「教養教育」の経緯とその展開

ここで、日本の大学の教育事情に目を移したい。

3.1 「教養主義」に基づいた「教養教育」の実際

大学で教えるべき内容は当然、時間の推移にしたがって変わってくる。日本の大学では明治時代からドイツ、フランスの教育制度の影響で、大学での学問を「教養教育」と「専門教育」に大別して来た。「教養」という語は江戸時代からあったが、現在の意味で使

① 中国共産党中央政治局審議・決定 2010年6月21日

われるようになったのは明治以降である。明治時代の教養主義が多分に立身出世を目的としたものであったのに対して、大正時代の教養主義の実現は個人の内面の問題であった。この時代に確立された日本的教養主義は、その後長い間、大学での学問の基本だった。外国語教育もこの「教養教育」に属し、専門に関する外国語は「原典講読」の名前で「専門教育」の一部として、有り体に言えばひっそりと行われてきた。

その後、経済成長期を迎え、日本の社会的な状況が様変わりするなか、大学進学率が急速に伸び、「大学の大衆化」が進んだ。そうしてみると従来の「教養教育」はもともと大衆の受けるものではなかったので、学問の内容に受け手がついていけず、教養教育に対して非難が殺到した。「一般教養科目は時間の無駄である。一年生の時から専門教育を進めるべきだ」「役に立たない外国語を学ぶより、専門教育の時間を増やすべきだ」などの主張である。しかし、1970年代から80年代当時の政府の高官、または大学教員は自分自身が受けてきた教養教育を全面否定する気持ちはなく、そのため、何十年も非難が続いたにしては、教養教育が全面的に変わるという現象はなかった。

3.2 「学士力」とは何か

日本の1990年代は「失われた10年」と位置づけられている。それから20年過ぎた今も、景気の底は見えず、大学を卒業しても職が見つからない、正社員になれないという事態に陥っている。遠い昔、大学は学生に教育を与えることだけが使命で、その後は自動的に社会に有能な人材を送り出すことが出来たが、現在、大学が非常に気にかけているのは学生の就職率である。卒業生を社会人として送り出せないような大学は社会的に認められない。そこで日本の政府も主にアメリカの高等教育に刺激を受けて2008年に「学士力」という新しい考えを打ち出した^①。

これは専門教育に重点を置きがちであった「学部教育」を「学士課程教育」と改称し、従来のように「教養教育」と「専門教育」を分けて考えるのではなく、4年間全体で「知識・理解」「汎用的な技能」「態度・指向性」「創造的学習経験と創造的思考力」の4つの能力を高め、どの学部を卒業したかにかかわらず、社会で生きていく力を身につけさせ、21世紀型市民を作ろうというものである。

「学士力」という考えが出されたころ、ちょうど筆者らは『基礎日語総合教程』第4冊の総合的なコンセプトをどこにおくか、議論を重ねているところだった。

日本で、「学士力」が打ち出されたのは、大学の大衆化、悪く言えば「大学生の生徒化」に実状を合わせた苦肉の策とも言える。しかし、中国の日本語学部の場合は事情が異なる。日本語学部では、日本語「で」学ぶなら経済学でも社会心理学でも、情報工学でもその基礎を採り入れることができ、それを卒業生の自信につなげられるのではないだろうか。

① 文部科学省中央教育審議会答申 2008年12月

4. 学士力養成と『基礎日語総合教程』第4冊

4.1 学士力の養成に必要な項目と第4冊が扱っているテーマの対照

付表1「学士力」の細目と『基礎日語総合教程』第4冊本文との合致状況は、左に文科省の掲げた「学士力」の内容をまず3つに大別し、それを更に13の項目に分けている。この項目1～6までは、特に目新しいものではない。後半の「比較的新しいもの」を見ると、7～11までは、主に企業の切実な要請によるもの、12～13はシチズンシップの養成のために掲げられたものだということがわかる。

表の右の部分には、第4冊のテキストの内容で、学士力の細目に合致する該当する部分の一例をあげてある。

4.2 第4冊の内容の細目と選択の理由

ここで、改めて第4冊全体の概略を述べる。第4冊では総合テーマ5つのもとに、それぞれ3つの課があり、また、その課の下に2つずつの本文がある。付表2は、それぞれのタイトルの一覧である。総合テーマ5つを簡潔に述べると、アーカイブズ、若者、統計、言葉、ロボットである。このテーマをなぜ選んだのかを次に述べる。

①未来のために過去を並べる ―人類の財産アーカイブズ―

「アーカイブズ」という言葉だが、この言葉自体は、日本でもまだそれほど普及していない。これは情報の収集、保存、整理を意味している。現在の大学生は中国が豊かになりつつある時代に生まれ、社会の激しい変化にさらされながら成長して来た。このような時、人は過去のことを忘れがちになる。アーカイブズへの理解と認識がよりいっそう必要になるのは、実はこんな時である。

2011年、「中国博物館事業の中長期発展計画」が策定され、中国は「博物館強国」を目指し、博物館の充実に力を注いでいる。学生に長い歴史を持つ国に生まれたことを意識し、その情報を整理することにどんな意義があるのか理解してほしいと考え、最初のテーマにした。

②過去の若者、今の若者

二番目のテーマは「若者」である。幼児から老年までの各世代の中で、若者は孤立感を持ちやすい。それは「自分たちは特別の世代である」「だから他の世代から理解されていない」という思い込みによることもある。彼らの苛立ちや悩みは、実は決して今の若者特有のものではないことを、ここで紹介した。

とは言え、現代の若者は厳しい就活戦線を生き抜き、また数十年前とは比較できないほど自他両方のプライバシーに配慮しなければならない。学生でいる間は大目に見られても、社会人になって顧客の情報を漏らしたりすれば、大きな問題になりかねない。「若者には若者の話題を」ということではなく、彼らの将来のためにいくつかのトピックを選んだ。

③数字で納得させる ―統計の方法―

「統計」のトピックは日本語学科の学生にとってあまり馴染みがない話題であろう。しかし、数字に関係のない仕事はないと言ってよい。小説家であっても、詩人であっても印税の交渉や税金の計算がある。まして、公・私企業で働けば売り上げから生産計画ま

で、数字の出ない日はない。

データ作成には理系のスキルが必要なことはもちろんだが、実は、解釈の言葉1つで印象も変わるといふ文系のスキルの部分もある。数字は往々にして言葉より強い説得力があるが、数字を単純には信じない態度と、どの部分をどのように疑うかというスキルは、大学を卒業した人間に求められる資質だ。このユニットを学んだ学生が数字の力と言葉の力の両方を使えるようになることを期待している。

④言葉のチカラ

「日本語は漢字を使うから、中国人にとってそんなに難しくないだろう」と考える学生も入学当初は多いわけだが、さすがに数か月も経てば、そのような考えは消えるだろう。しかし、同じ漢字があるがゆえに、何十年学んでも見落としていることがあるものだ。まず、自国語である中国語を客観的に見ることから始めることは、学生が言語を科学的にとらえる基礎を築くもので、将来、第3、第4の言語を学ぶ時のために役立つと考える。

⑤22世紀に生まれる「人間」ーロボットと人の共生を考えるー

最後のテーマはロボットである。ロボットがロボット工学に関係した話題であるのは当然として、ここで触れている小テーマは、それぞれ心理学、哲学、倫理学、社会学、社会福祉学などとおおいに関係がある。つまり、「ロボット」という話題は、人間を考えることにもつながる学際的な話題なのである。特に学生に考えて欲しいのは、将来、必ず問題になる、人間並み、または人間並み以上のロボットの「人権」だ。将来、学生たちが日本語を忘れてしまったとしても、この教材のテーマは心に残り、何かの折りに、思い出すこともあろう。

5. 日本語「で」学ぶことの実践

「教養や知識、その運用能力」はなにもすべて自国語で学ぶ必要はない。「法学部を出たから、法律の本以外の専門書は読んだことがない」「経済学部を出たので、数字には強いが、報告書の報告文を書くのは苦手だ」と嘆く学生がいることを考えると、日本語専攻のカリキュラムは、オールマイティーにこれらの問題を解決出来る潜在的な性格があると言える。

ここではあるユニット一つを例にとり、どのようにして、日本語「で」学ぶのかを紹介する。

付図1①はユニット1の実践例である。ここに至るプロセスは「インプット→気づき→理解→アウトプット」の段取りを踏んで展開されている。

まず、第1課で、インプットとして「アーカイブズとは何か」と「三鷹の森ジブリ美術館」という本文を学生に与え、その中から情報の収集、保存、整理の意味に気付いてもらう。そして内容や言葉を理解し、習得した上で、次は自分の大学の図書館の特徴につい

① 関連図のアイディアは『基礎日語総合教程』の監修者である曹大峰先生(北京日本学研究中心)からご教示いただいた。

て話しあう。そして、さらに自分のコレクションを人に見せる時のユニークな方法を考える。最後にアウトプットとして、ユニークな博物館を考え、ポスター発表をする。

第2課も第3課も同じような段取りを踏んで、日本語での情報収集の方法、情報の保存、整理の意味を学び、各課の課題を通じて学んだことを実際に使っていく。そして集大成としてアーカイブズの未来に向けて図書館の改善のために提案してもらう。

このような教育内容は「情報管理学部」の基礎教育の一部である。日本語専攻の学生はこれらを日本語「で」学ぶ。特に学生に注意を喚起しておきたいのは、アーカイブズを他人事ととらえないことである。アーカイブズは博物館、国の歴史などというスケールの大きなことで用いられる概念ではあるが、個人のブログやメールの管理などにも必要な概念である。高度情報社会に生きる人間として情報の管理をどうするかを学生に充分認識させるために、アウトプットには学生の身近な話題を出し、興味を惹きつけるようにした。

ほかのユニットもこのような段取りを踏んで、付表2で示した「学士力」として備えるべき知識と教養を日本語「で」学ぶことを実践している。

6. まとめ

以上、大学生の人材育成に有用な教科書を目指して模索した結果を紹介した。『総合日語』第4冊を学生が使うとしても、それはわずか半年という短い期間のことに過ぎない。しかし、日本語のカリキュラムの中で、「総合日語」の教科書使用科目の占める時間数は多く、やはりその影響は大きいのではないか。第4冊が学生たちの人生にも示唆を与えられることを願っている。これからも、試行錯誤しながらよりよい教材開発に努めていきたい。

参考文献

- [1] 赵华敏. 2011. 基础日语综合教程4. 北京: 高等教育出版社.
- [2] 赵华敏, 林洪. 2011. 教学理念的变迁对中国大学日语教育的影响. 日语学习与研究(2011・4).
- [3] 陈俊森. 2012. 试论日语专业的人才培养目标. 日语教育与日本学(第2辑). 上海: 华东理工大学出版社.
- [4] 王前. 2005. 中西文化比较概论. 北京: 中国人民大学出版社.
- [5] 岩谷信. 2010. 日本の大学での「教養教育」の新たな動向. 教育研究所報告集10. 東北学院大学.
- [6] 日本学術会議. 2010. 提言 21世紀の教養と教養教育. 日本学術会議日本の展望委員会.
- [7] 文部科学省. 中央教育審議会. 参考資料. 学士課程教育の構築に向けて(答申). 2008年12月第67回総会.

作者信息

赵华敏 女 北京大学教授

研究方向: 日语语言研究 日语语用学研究 E-mail: hmzhaopku@163.com

大野纯子 女 大正大学专职讲师

研究方向: 日语语言研究 语法学 E-mail: j_ono@mail.tais.ac.jp

付表1 「学士力」の細目と『基礎日語総合教程』第4冊本文との合致状況

「学士力」養成の細目	合致する『基礎日語総合教程』第4冊のトピック(一例)(カッコ内の数字はユニット、課、Stepを表す)
《従 来》	
1 多文化・異文化の理解	ユニークな博物館を例に、見せる側、見せてもらう側という従来の立場を離れた「発想の自由」の一例を知る(1-1-2)
2 人類の文化の理解	漢字の継承と使用についての中国内にとどまらない知識を得る(4-11-2)
3 社会と自然に関する知識	障害者はボランティアを受ける側であると決めつけない柔軟な発想を知る(2-6-2)
4 本国語と外国語のスキル(4技能)	会社や商品のネーミングを例にとり、社会にそれが受け入れられる方策を考える(4-10-2)
5 論理的思考力	数字を読む力と、統計に対する警戒の必要性、特に何を疑うべきかを知る。(3-9-1)
6 倫理観	職業上、またはボランティアで知った他人のプライバシーの守秘義務について知る(2-6-1)
《比較的新しいもの》	
7 数量的スキル	アンケート、グラフの作成、その分析と説明方法を学ぶ。戦略的な統計資料作成の必要性を学ぶ(ユニット3全体)
8 情報リテラシー	「バーチャルリアリティ」を利用して、何か出来るかを知り、このような最先端技術を利用する時の注意点も学ぶ(1-3-1)
9 問題解決力	子どもの就職に反対する親を説得したり、就活で内定した企業を断る際、しかるべき人に相談する例を知る(2-5-2)
10 自己管理力	仕事での失敗を例に、他人の評価の分析、自己の内省を行い、そこから教訓を得る姿勢を学ぶ(3-9-2)
11 他者との協働・リーダーシップ	プレゼンを例にして、グループワークで役割分担を決める方法から、一つのプロジェクトの完遂までを学ぶ(3-8-2)
12 市民としての社会的責任	自分の思いだけでなく、「公共知」を持って物事を広く考える態度を知る(2-5-1)
13 生涯学習力	図書館司書の本来の仕事を知り、社会人になってもアーカイブズ施設を利用する態度を身につける(1-2-2)

付表2 『基礎日語総合教程』第4冊 ユニット・課・本文のタイトル一覧

ユニット1 未来のために過去を並べる ―人類の財産アーカイブズ―	
1	さまざまなアーカイブズ 【本文】アーカイブズとは何か 【本文】三鷹の森ジブリ美術館
2	アーカイブズに携わる人々 【本文】付き添う人 【本文】司書 ― 終わってから始める仕事
3	アーカイブズの未来 【本文】故宮博物館のバーチャルリアリティ 【本文】「人生の学校」としての博物館
ユニット2 過去の若者、今の若者	
4	若きウェルテルの悩み 【本文】「若きウェルテル」たちの相談相手 【本文】今のウェルテルたち
5	決心 【本文】ハンサム・ウーマン 【本文】決心が鈍った日もありました
6	ボランティア 【本文】ボランティアを継続させるために 【本文】車椅子ダンス
ユニット3 数字で納得させる ―統計の方法―	
7	調査用紙の作成方法 【本文】後で泣かないためのポイント 【本文】これじゃあ、先生はOKだしっこないよ
8	図表の利用 【本文】さまざまなグラフ 【本文】プレゼンは、映画制作と似ています
9	たかが統計、されど統計 【本文】統計のウソを考える 【本文】正直に並べればいいというものではなかった

(续表)

ユニット4 言葉のチカラ	
10 ネーミング	【本文】トメから清子、真由美、里緒奈、そして ^{きらら} 稀星 【本文】社名ネーミングの難しさ
11 漢字と漢文	【本文】言葉とアイデンティティー 【本文】漢字の履歴書
12 人は言葉を作り、言葉は人を作る	【本文】約束の楽しみ 【本文】日本人の言語感覚
ユニット5 22世紀に生まれる「人間」ーロボットと人の共生を考えるー	
13 ロボット工学の今	【本文】病院で働くロボットに関するレポート 【本文】ロボット研究の二つの潮流
14 ロボットと人間社会	【本文】国産レスキューロボ、発進！ 【本文】ロボットと未来社会
15 ロボットと心	【本文】心を持つロボット 【本文】鉄腕アトムは泣いている

ユニット1 未来のために過去を並べるー人類の財産アーカイブズ (関連図)



付図1 「ユニット1未来のために過去を並べるー人類の財産アーカイブズ」関連図

关于日语会话课的调查报告*

东华大学 劳轶琛

[摘要] 本研究选取了与培养交际能力密切相关的日语会话课作为切入点,以上海设有日语专业的各高校的会话课授课教师为对象,围绕会话教学的情况,采用问卷和采访的形式进行了调查。

问卷调查结果显示:①会话课的授课教师由中国教师 and 外教两部分构成,各占一半左右。②通常从大一下学期开始会话课,持续3个学期。③班级人数为16~30人,作为会话教学的规模,人数稍显过多。④很多教师不使用现成的教科书,或认为现有的教科书有不甚理想之处,主要体现在“例句不够丰富”“相关日本文化情况介绍不足”“课堂活动或教学方法示例较少”等。⑤课堂教学中开展得较多的活动为“角色扮演”和“朗读练习”。⑥课堂教学以外,也有学校或教师个人组织演讲会等各类日语活动,增强学生的学习积极性,提高学习效果。

关于目前会话教学的难点,除班级规模过大以外,主要还体现在没有日语环境、学生缺乏主动性以及有效的教学方法相关的信息匮乏。

在问卷调查的基础上,选取了三所在会话教学方面较有特色的高校为对象,对这三所高校的会话任课教师分别进行采访调查,进一步了解该校会话教学的理念和特色。通过特色事例的介绍和分析,以期对探索改善现状有启示作用。

[关键词] 日语会话课 交际能力 会话指导 问卷调查 课堂教学 课外活动

1. 序

“会话课”,有些学校也称为“口语课”或“口头表达能力课”,无论叫法如何,综合此类课程的性质即是培养交际能力中“说”的技能的基础课。

教育部制定的《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》(1990年版)中明确提到:“外语教学的最终目的是培养学生具有跨文化交际的能力”。在教学大纲的指引下,中国的日语教学

* 此论文为东华大学“中央高校基本科研业务费专项资金资助”(supported by “the Fundamental Research Funds for the Central Universities”)